

かつての家族

浜 葉子

人生の狂いは、こんなことから始まった。

「今回の縁談、断る理由がないわね」

身内に誇りをもっていた母は、そう言った。見合いの相手は、母の従姉の孫であり、兄の妻の甥でもあるという血族関係が複雑に絡んだ人だった。年齢は三十歳。国家公務員になることは決まっていたがオーバードクターの身で収入はなかった。ラフな服装で現れ、想像とは違い意外な第一印象をもった。そして見合い当日の晩、仲人である伯父の息子から「保証付き、推薦するよ、いい奴だから」と電話があったのも気持ち悪さを動かされ、付き合うことになった。

二人きりで会うことはまったくなかった。いつも大学近くにあった夫の行きつけのスナックで、研究室の仲間を交えてワイワイといった会い方だった。つかみどころがない、そこに魅力を感じることもあったがそれは、仲間のカモフラージュがあつてのことで、本来の姿が霞んでしまうため、夫の人格を見誤っていた。

会う前から決まっているも同然の空気が周囲の者たちの間には流れていた。母は自分の身内であることから気を許し、まだ決まってもいない相手を度々泊まらせた。家族が寝静まると躊躇せず快楽を求め、根気のいい作業を押しつけ、夢中になる男へと豹変し、性の暴力には為す術もなかった。母は決め兼ねていた私に決心させるため、夫の不埒な行為を知りながら見逃していたのだろう。私の心中を忖度してくれる身内はおらず、それぞれが両家と仲人との間で話はすめられ、人生を共にする覚悟ができていままま結婚は決まった。世の中は、第二次オイルショックが起きていた。

片親だった母親に依存していた夫は、結婚の準備は親に任せ、私に相談することもなくどこか他人事のようなふうだった。私の母はというと、これで一件落着。姑の意向に従い同居のような暮らし方まで受け入れてしまった。母は封建的な姑とは離れたほうがいいと言っていたのに。ここはさっさと切り上げ、長男の結婚に取り掛かりたかったのだ。

三人きょうだいの我が家で兄は、跡継ぎであることから別格の扱いだだった。比較されるのは姉と私。美貌で素直な姉は母の自慢。それに引き換え私は愛娘ではなかった。それだからといって世間体を気にする母は、次女の嫁ぎ先はどこでもいいというわけではなかった。それには適当な相手だと思つたに違いない。

結婚当事者不在の家と家の結婚にすり替り、このことに違和感をもっていたのは私だけで、夫は母親が気に入る相手ならばそれでよかった。なぜなら持病を抱えた上に兄嫁と仲

違いしていた母の世話をしてくれる家政婦を手に入れ、更に自分の子孫をのこせるというオプションまで付けば、それでよかった。それには私が都合の良い相手だった。

結婚生活は、夫のモラルハラスメントで重い空気が常に漂っていた。忍従しなければならぬ私の心身は疲れきり、長患いのような自分を持ちこたえるのが精一杯だった。両家に抵抗できず、そんな環境の下でふたりの子を育てながら姑を介護し看取った。私、四十歳になっていた。納骨が済み、夫に「私に言うことはないの」と尋ねてみた。「何のこと」素っ気ない夫に、

「今まですつと面倒みてきた私に礼の一言ぐらいあってもいいと思うのだけれど」

すかさず返ってきた言葉に耳を疑った。

「どうして礼など言う必要があるのだ。母をみてくれなんて、言った覚えはない。あなたが勝手にやったことでしょう」

そして、畳みかけるように言葉は続いた。

「あなたはあと十年生きていればいいよ」

娘が高校を卒業するのが十年後だった。この言葉のナイフは心につき刺さり、天国に手を触れながら、死を生きるような私になってしまった。

姑が亡くなると、夫はそれまで住んでいた湘南の地をすぐにも離れたがった。訳は、親族に囲まれ煩わしい土地であったからだ。身内の手前、妻の希望で妻の実家がある横浜に仕方なく引越す。というシナリオを演じ、私を悪者に仕立て上げた。家を建てた土地は私の父が所有する土地だった。間取り図をみせられると、そこに私の部屋はなかった。まさか、唾然とした。

実は、長男が生まれ間もない頃から寝室は別で、その訳は「稼いでくる男が子どもの夜泣きに付き合うことはない」と嫁に嫉妬する姑の差し金だった。だから、用があれば「来い」と呼ばれ、従わなければ翌日から「帰る意味がない」と言って帰宅しなかった。そして「あなたが妻の義務を果たさないから」と姑から叱責された。人格は無視され私は物として置かれていた。介護と子育てでポロポロだった私の前を、女の影が見え隠れしたのもこの頃だった。夫を追及すると、

「世の中あなたのように恵まれた女性ばかりではない。面倒を見ているだけ。あなたは理解ある革新的な女性だと思っていたけれど」

夫は躍起になって弁明した。姑は承知の上だった。実家の両親は、彼も若いから仕方ないと私を制した。このころの私は、孤独を加減する術すら涙で流されてしまっていた。

話を戻すと、新居も寝室は別々に計画されると思っていたし、望むところだった。とは言え、妻の部屋が無いとは思ってもよらなかった。それで、納戸を息つける自分の部屋に使

った。当時、息子娘と私の三人だけで引越すアイデアはあった。しかし両親は、二重人格を見事に使い分ける婿を信じ切っており、私の考えは一蹴された。

引越してから、息をしながら窒息している感じで、死にはしないまでも生きている心地がしない、そんな日がつづいた。朝起き上がれずにいると、部屋に近寄る人の気配があり、ノブに手をかけ開きそうになるそのとき、「まだ生きています」と反応すると、すぐごとと退く夫がドアの向こうにいた。そんなとき、生きるに生きられず死ぬに死ねない自虐の気分になり、生きていることを悔いた。

横浜での暮らしが始まると私の世話を待っていたかのように両親が次々と体調を崩し、看病の末父が他界。その八年後に母も亡くなった。母の遺品を整理していた時のこと。タンスの引き出しを引いて姉が言った。

「この包み、まりこさんへ、ですって」

たとうに包まれ、メモ書きが添えてあった。新聞折込チラシの裏面に鉛筆で走り書きされていた言葉は、

「まりこには、今までなにもあげていなかったもので、これはまりこにあげます。とても良いものですからね。母より」と書かれていた。

たとうに包まれていた着物は、母のお気に入りではあったが、母が私に譲ると決めるまでの心持ちを想うと寂しかった。だから、母の移り香の残る着物には袖を通したくなかった。姉には、私の気持ちかわかるはずもなかった。ヨーロッパ各地とニューヨークでの生活が長く、平穏な結婚生活を送っていた姉から、母は私を遠ざけようとしてきた。姉を羨む妹を牽制し、姉の生活ぶりを耳に入れないことが無難と判断したのだろう。それが私に向けた親心だった。だから姉と行き来するようになったのは、両親が病気がちになってからのことだった。

私の結婚生活は、夫のモラルハラスメントで、ほとんどの時間は忍従の連続だった。母は晩年そのことをさすがに薄々感じていながら、それでも自分の目が黒いうちは別居も離婚もしないでと願った。家同士のしがらみでできた柵を越えられず、追いつめられて生きていたそんな娘を不憫に想うことはなかったのか。そう勘繰りたくなくなるような両親の過去を、母が亡くなる直前の深夜に病室で聞くことになった。

その日はクリスマスだった。港を見下ろす病室から、水面を彩るイルミネーションをぼんやり眺めていたとき、突然話し出した。

「今まで話さなかったけれど、お父さんと私は離婚した者同士が結婚したの。相続で必要になる戸籍謄本をみて驚かれても思っ、あなたに言っておくわね」

何を言われているのか、すぐには理解できなかった。

「お父さんの相続の時は、子どもたちにわからないように私が手続きしたけれど、今度は

わかってしまうでしょう」

疑ったこともなかった両親の過去。

「お父さんも私も相手とは一年ちよつとで別れたから子供はいないわよ」

頭の中は混乱し、子供がいたかどうかなんて考えも及ばなかった。母は事務連絡でもするかのようになんかと話した。

「ふたりとも自分たちは離婚しておきながら私のことは今まで……」

言葉が続かなかった。

「もう、それはいいことにしてよ」

手で払いのけるような仕草をして、私の追及を遮った。

「それにしても、彼は私の病状を知っているの」

一度も見舞いに来ない夫のことを訊いてきた。

「知っているはずよ。詳しく書いたメモを置いてきたから。それに私が夜の電話に慌てて出かけることから、病状が芳しくないことは察しがつくでしょう」と言うと、

「知っているながら来ないなんて、ずいぶん冷酷な人ね」

と、ため息交じりに吐き捨てた。夫の本性の一部に過ぎないが、身につまされたのだろうか。この時まで封じ込められてきた言葉を口にした。

「離婚したいなら、しなさい」

その言葉は、もはや虚しい言い訳だった。それでも、私へのクリスマスプレゼントのように思えた。胸のつかえが降りたのだろうか。年が明け、七草が過ぎたころ、八十七年の人生を閉じた。

母が他界すると夫の無視は一層激しくなり、驕慢な振る舞いは私を更に苦しめた。ふたりの子どもは既に家を去っていた。もう我慢することはない。離婚届をテーブルに置き、夫が迎えの車で出勤した後、キャリアバッグひとつ持って家を出た。妻が悲しむ姿を見て喜びを感じていた夫が、妻の願いを受け入れるとは考えにくい。そして、話し合える人間ではないことも知っている。それでも、私の人生はつづく。ひとりになり、胸一杯に呼吸できるようになっただけでも心は軽くなった。

お母さん、いつかあなたを許せるかもしれない。でも忘れない。ただ、あなたの優しさに逢いたかった。